

## “傷寒論鍼灸配穴選注”より学ぶ“陰陽太極鍼”

東方鍼灸院院長  
陰陽太極鍼研究会代表  
吉川正子

### ○傷寒論鍼灸配穴選注について

“傷寒論”は日本では湯液の書として、最も重視されているバイブルの如き本であるが、“傷寒論鍼灸配穴選注”（単玉堂(著)1984年中国人民衛生出版社、1996年日本語訳）という書を読むと、実は湯液よりも鍼灸治療においてこそ重要な本である。この著書に書かれている、陰陽論、五行論、十二経脈、奇経八脈、三陰三陽の六経弁証、病の伝変、病の所在等から述べられる配穴は、私の臨床経験から知り得た“経脈の流れ”や“開穴”の意味を明らかにしてくれる。

### ○陰陽太極鍼とは

鍼灸医学が現代医学と最も際立って違う所は、鍼灸医学が陰陽論を基本理論としている所である。鍼灸の原典『黄帝内経』に“陰陽は天地の道なり、万物の綱紀なり、変化の父母なり、殺生の本始なり、神明の府なり（陰陽応象大論）”と書かれており、陰陽であらゆる事を分析し、統合する考え方が述べられている。鍼灸治療はこの陰陽を調整する事であり、調整すれば病は癒える。

私は中医学、東洋医学の基本理論である陰陽論で、左右の陰陽（“繆刺法”、“巨刺法”）、上下の陰陽（“標本根結理論”）、左右上下表裏の陰陽や、寒熱、虚实の陰陽、時間の陰陽（“子午の陰陽”）、局所と全体の陰陽（“微鍼療法”－耳鍼、頭鍼、手鍼、足底反射など）などの考え方を一つ一つ認識し、実践するようになり、その多大な効果から経脈の不思議を強く感じてきた。それは現在“陰陽太極鍼”という刺さない鍼治療へと発展した。

手技は皮内鍼や王不留行の種子を“開穴”に貼るだけで、体表の一定部位の反応（圧痛、硬結、膨隆、陥下、発汗、寒熱など）の変化を確認して、症状の改善をはかる。“開穴”とは、経絡の流注を手で撫でて、特に過敏な所（気持ちが良いかくすぐったいなど）を、患者さんに問い、大抵の場合、本人の主張する場所である。また症状により、関連経脈がその日、その時に開くツボであり、皮膚感覚が鈍い場合は圧痛、その他で考慮して選べばよい。複数ある内の、最も過敏な点の一穴から数穴で体表の反応（腹部募穴、腓腹筋、首周六合、背部愈穴等）が大きく変化する。

### ○皮膚刺激のみの治療の有効性

置くだけで効く理由は、皮膚は中枢神経の脳と同じ外胚葉であり、発生生物学的に皮膚（細胞膜）の一部が陥没して、そこが脳になったと言われており、また皮膚の一番表層の角質層にあるケラチノサイト（角化細胞）に情報伝達物質の受容体がある為、表皮に与えた軽い刺激でも即遠隔（皮膚刺激の情報伝達速度は秒速 0.02 秒）に伝達され、局所が正しく処理されるのである。

### ○体表観察ができれば誰でも効果的な治療ができる

#### ①舌診……詳しくは舌診の本を参照。

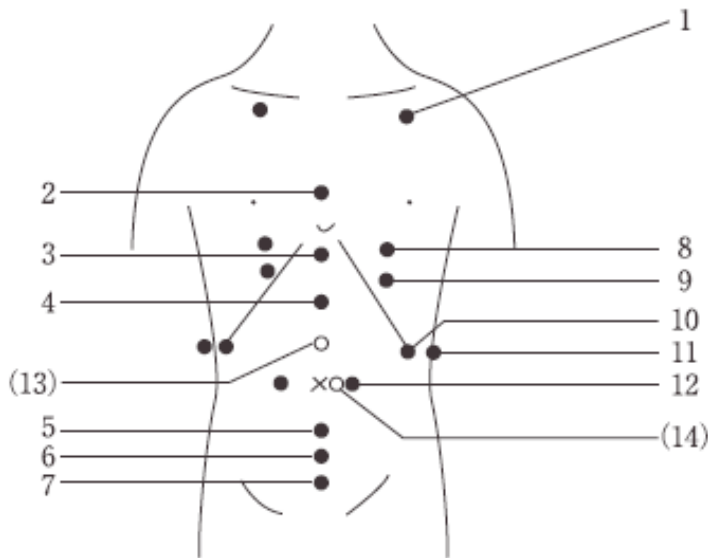
舌診は東洋医学の診断法の重要な部分であり、客観性があり、病気の発生発展回復の過程を迅速かつ鮮明に反映するので、大変有意義な方法である。舌は一見しただけで、陰陽、表裏、寒熱、虚实の八綱弁証と、肝胆、心肺、脾胃、腎の臟腑弁証、気血津液、瘀血、痰湿、あるいは外邪の性質まで弁別できるので便利である。

②脈診……詳しくは脈診の本を参照。

六祖脈の浮沈で病位、遅数で寒熱、虚実で病勢等をうかがい、脈状や六部定位で臓腑の虚実、邪気の盛衰などを診る。特に促結代などの不整脈があれば注意する。また、遅なら置鍼や灸を、数なら速めの治療が良い。

③腹診……主として募穴の反応を診る。

募穴は胸腹部の臓腑の所在部位近くにあり、臓腑の反応を現しており、合計 12 穴ある。募穴は腹部の重要な診断点として活用でき、臓腑経脈弁証には欠かせない体表観察点であり、治療効果の判定においても重要なポイントである。

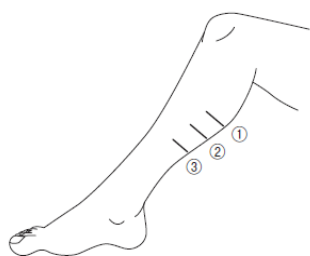


募穴	臓腑	主な治療穴	所属経
1. 中府	肺	尺沢～少商	肺経
2. 膻中	心包	曲沢～中衝	任脈
3. 巨闕	心	少海～少衝	任脈
4. 中脘	胃	足三里～厲兌	任脈
5. 石門	三焦	天井～関衝	任脈
6. 関元	小腸	小海～少沢、下巨虚	任脈
7. 中極	膀胱	委中～至陰	任脈
8. 期門	肝	曲泉～大敦	肝経
9. 日月	胆	陽陵泉～竅陰	胆経
10. 章門	脾	陰陵泉～隠白	肝経
11. 京門	腎	陰谷～湧泉	胆経
12. 天枢	大腸	曲池～商陽、上巨虚	胃経
(13). 下脘	(脾)	陰陵泉～隠白	任脈
(14). 盲兪	(腎)	陰谷～湧泉	腎経

募穴の募は募集の募であり、ないものを求めている状態を表し、所属の臓腑経脈の要求を表している。それ故、治療においては、募穴の反応（圧痛、硬結、膨隆、陷下、寒熱、発汗、変色、過敏等）をみて、関連経脈の経穴に鍼灸をして、その反応をなくすようにすればよい。要求が満たされれば募穴の反応は消失若しくは軽減する。

募穴の反応は、関連経脈の要穴（井穴、榮穴、兪穴、経穴、合穴、原穴、郄穴、絡穴、八脈交会穴、下合穴等）や対側の募穴、背部兪穴などを取穴して、反応が消えるような治療（鍼や王不留行又は灸等）をする。募穴の反応が複数ヶ所の場合、四診総合して、最も主要な経脈経穴を選び治療する。

④腓腹筋で下肢の流注異常を確認する。

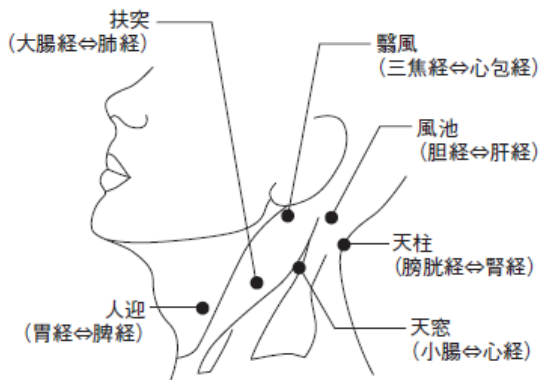


- ①中央より 1 寸上：脾の反応が表れる
- ②中 央：腎の反応が表れる
- ③中央より 1 寸下：肝の反応が表れる

下肢を把握して硬さや圧痛を診ておくと、取穴後の変化の確認に便利である。全身の気血の流れ具合はふくらはぎにも影響を与えている。多くの場合、一番の過敏点に施術をすると流れが改善する。

### ⑤首周六合で頭部への流注異常を確認する。

首周六合の部位で経別理論で言う頭部への陰陽両経の流注異常が確認できる。

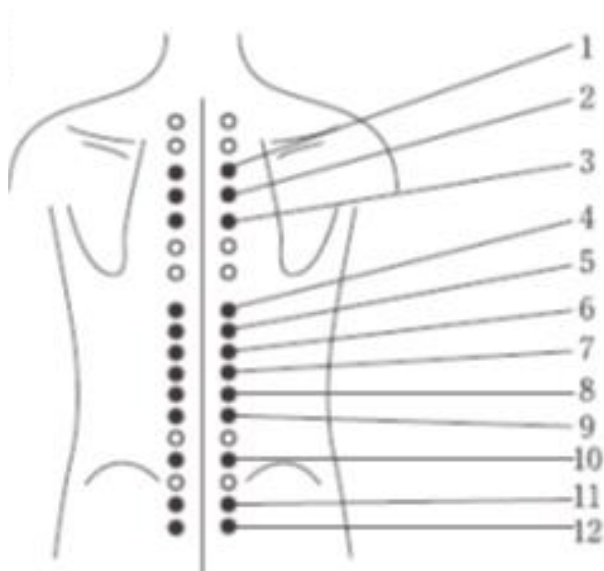


喉頭隆起の高さを横へ平行に、胸鎖乳突筋前縁が「人迎」、筋中央が「扶突」、後縁が「天窓」、耳の直下が「翳風」、頭蓋骨の下縁、胸鎖乳突筋の付着部後縁が「風池」、僧帽筋付着部が「天柱」である。

経別理論とは、十二経脈の内、肝経と心経以外の陰経は殆ど頭部へ流注していないが、本経から分かれた経別という別行する支脈が頸部で表裏の陽経と合流し、頭部へ流注している。故に、合流する頸部の六ヶ所で十二経脈の頭部への流注異常が確認できる。それを参考に各経絡に対応した、陰陽のバランスを考慮した過敏点に施術をすると改善する。

### ⑥背診……主として背部俞穴の反応を診る。

背中にある背部俞穴の中で、臓腑に関係のある経穴は肺俞から膀胱俞まで計 12 ある。俞穴は、臓腑機能の異常を表す反応点であると同時に治療点でもある。症状あるいは部位などにより、何の臓腑・経脈に関係深いか考え、その俞穴附近をよく調べる。まず、よく診て皮膚の状態を調べる。腠理（毛穴）が開いていれば、そのツボに関連する臓腑は虚している。発汗の有無、体毛、変色、陥下、膨隆などで確認したあと、背部膀胱経にある俞穴を上から順に両側同時に圧してツボの反応（圧痛、寒熱、ざらつき、発汗等）を調べる。次に皮膚上を軽く撫でて過敏な所を探す。



俞穴
1. 肺俞
2. 厥陰俞
3. 心俞
4. 肝俞
5. 胆俞
6. 脾俞
7. 胃俞
8. 三焦俞
9. 腎俞
10. 大腸俞
11. 小腸俞
12. 膀胱俞

異常のある俞穴の左右対称の同俞穴上の過敏点に施術をすると、とたんに異常のあった部位が改善される。また様々な陰陽のバランスをとる、対側の俞穴への取穴法でも、それぞれの俞穴の状態が改善する。

## ○切経……十二経脈の輕擦により“開穴”を探す。

体表観察において何経でどのような異常であるかが分かれば、その経の経穴を輕擦して“開穴”を見つければよいが、十二経脈の要穴の反応を確認すると意外な所に“開穴”が見つかることもあるから軽く撫でてみるとよい。肘から先、膝から下の手足の三陰三陽、十二経脈の流れ具合を、手指で軽く撫でて過敏な所があったら、次にどの方向に撫でた方がよいか患者に問い、流注に対し順なら補（王不留行）、逆なら瀉（針先を逆に向けた皮内鍼）を置く。

## ○“傷寒論鍼灸配穴選注”より学ぶ“陰陽太極鍼”

この“傷寒論鍼灸配穴選注”という書物の内容は、殆どが六経弁証の鍼灸配穴についてであるが、その治療法や処方配穴がどのように選ばれているかという事にも非常に詳しい。

処方配穴は、鍼灸治療に於けるあらゆる取穴法や配穴法、病候治要から導き出された配穴として記載されており、六経弁証鍼灸配穴に関しては、傷寒論に則り一つ一つの病位に関して更に詳しく分類されて、湯液方剤と処方配穴が併せて書かれている。

特に“傷寒論鍼灸配穴選注”の「第1章 運針配穴大法と治要」の冒頭には、靈枢を引用した重要な記載がある。

靈枢の刺節眞邪篇に言う、『鍼を用いる者は、必ずまずその経絡の虚実を察し、切して之を循らせ、按じて之を弾じ、その応動する者を視、その後之を取り之を下す』とは、経絡学説が臨床応用上、鍼灸と不可分な関係にあるという事を述べている。

また、靈枢の衛氣篇に『よく陰陽十二経を分かつ者は、病の生ずる所を知る。虚実のある所を候い知る者は、よく病の高下を得る』とは、経絡の変動が疾病の發生に、虚実、高下があることを説明しており、故に、疾病の觀察には必ず経絡学説に基づいて行ない、原因と性質を見極め、部位の変化を調べ、その治療を行なうのが正しい治療と言える。

このように書かれている通り、“陰陽太極鍼”は、体表観察と切経により“開穴”を求め、適切な治療により部位の変化を確認して治療に導く方法で、将に古典の記載通りの治療法を具体化したものと言えらる。

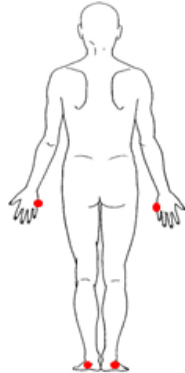
経絡には全身を統一的に結びつけ機能させている情報のネットワークの役割があり、また経絡は気血（エネルギーと物質）が循環し、血液、リンパ、神経系等、身体のすべてを統括する生命の基本であり、生命の成り立ちから発病や治療に深く関わっているという認識に基づいて、経絡の循環を正常にする事を目的に施術している。そしてその治療効果により古典や経絡学説の正しさを改めて実感する事ができるのである。

## ○ “傷寒論鍼灸配穴選注”にある六経病の主要症状と主な配穴例

### • 太陽病(太陽 膀胱経・小腸経)

主証 頭項強痛 身痛 咽逆 表証 陽証

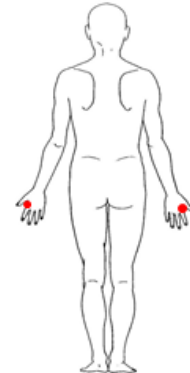
配穴例 後谿(太陽小腸経:督脈) 申脈(太陽膀胱経:陽蹻脈)



### • 陽明病(陽明 胃経・大腸経)

主証 胃腸病(消化器症状) 前頭痛 等

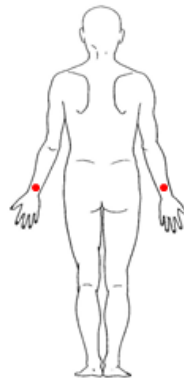
配穴例 足三里(陽明胃経) 合谷(陽明大腸経)



### • 少陽病(少陽 胆経・三焦経)

主証 寒熱往来 胸脇苦満 偏頭痛 口苦 咽乾 目眩

配穴例 臨泣(少陽胆経:帯脈) 外関(少陽三焦経:陽維脈)

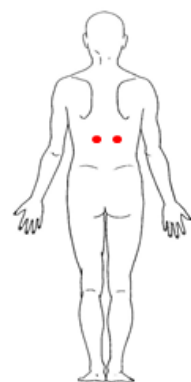
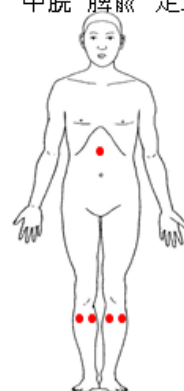


### • 太陰病(太陰 脾経・肺経)

主証 湿土病 胃腸病

配穴例 太陰病の治療は湿を乾燥させていく事が中心となる。

中腕 脾俞 足三里 陰陵泉

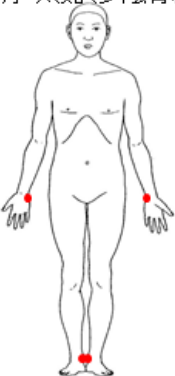


### • 少陰病(少陰 腎経・心経)

主証 水火の陰陽のバランスが崩れた症状 (心腎不交)

心煩 不眠 口燥 咽痛 命にかかわる症状も

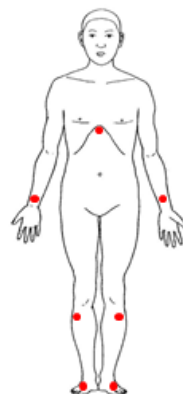
配穴例 太谿(少陰腎経) 神門(少陰心経)



### • 厥陰病(厥陰 肝経・心包経)

主証 上熱下寒 寒熱錯雜

配穴例 内関 太衝 足三里 巨闕



○ “傷寒論鍼灸配穴選注”にある、一般的に便秘によく使用される、  
整腸作用のある麻子仁丸の配穴から“陰陽太極鍼”の“開穴”の意味を考える

①処方

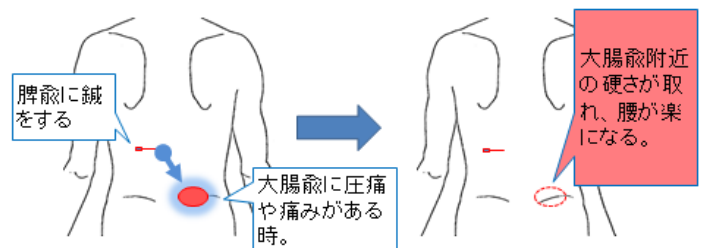
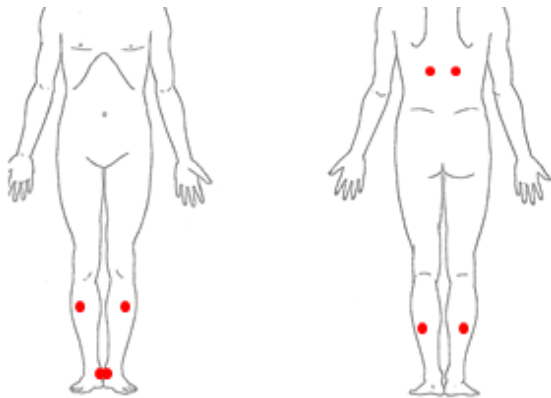
傷寒論鍼灸配穴選注（249）麻子仁丸 【配穴】脾兪、上巨虚、太谿、飛揚

② “開穴” からみた意味

- ・大腸は小腸から送られてきたものの水分を吸収して程よい硬さにして体外へ排泄するという働きがあるが、脾虚で水穀の運化を主る働きが低下すると、胃強(胃熱)脾弱となり“脾約便秘”で腸内が乾燥して便が硬くなる。それ故、**脾兪**に治療すると大腸の働きが太陰脾⇒陽明大腸の陰陽のバランスがとれて、大腸の働きが改善する。この時、大腸兪の圧痛、硬結が消失するので触診でもそれを確認することが出来る。

(麻子仁の配穴 脾兪、上巨虚、太谿、飛揚)

(左右、上下、表裏の陰陽を調整する)



「脾兪」で反対側の「大腸兪」の圧痛、こわばりなどが瞬時にとれて緩み、腰が楽になる。これは、太陰脾と陽明大腸の表裏関係で、陰陽のバランスがとれて変化するものと考えられる。

- ・便秘の多くの場合に、腹部の天枢（大腸の募穴）にも圧痛があるので、足の陽明胃経上の**上巨虚**（大腸の下合穴）に“開穴”が出る事が多く、ここに治療すると即天枢の圧痛、硬結も消失して、大腸の働きが改善することが確認できる。
- ・**太谿**は腎経の原穴であり、腎経は臍傍の盲兪を通過しているので、**太谿**（腎経の原穴・腎は二便を主る）に鍼をすると、ほとんどの場合腎経の流れが良くなって、盲兪の圧痛、硬結も消え、腹部が柔らかく暖かくなる。
- ・背部の膀胱経の滞りを**飛揚**でとる。飛揚は（膀胱経の絡穴なので）の原絡配穴で腎・膀胱経の両経の流れが良くなり、滋腎壯水で水分の供給が改善し、全身的に楽になり、その後便がスムーズに排泄出来るようになる。

③まとめ

このように“傷寒論鍼灸配穴選注”を読むと、それぞれの症状が、どのようにして起り、どの経脈に反応が現れ、どうすれば良くなるかが分かる。経脈は臓腑に属し、体内を網の目のように隈無く廻り、その経が何処を通り、又その場所が何経であるかということが病を示す事となり、その臓腑経脈が病理機序を反映したものである事が理解出来る。そして、その配穴が“陰陽太極鍼”における“開穴”の部位と重なる事が多く、何故そのような配穴になるのかを理解する事が出来る。



## ○陰陽太極鍼の特徴

- ①体表観察ができれば誰でも効果的な治療ができる。
- ②選経、選穴は切経して“開穴”で決まるので、配穴に悩まない。
- ②反応の変化を確認できるので、患者と術者の双方で納得した治療ができる。
- ③刺さずに置くだけの治療なので、患者に安心して貰える。
- ④症状の改善に即効性がある。
- ⑤経絡や経穴の実態が見えてくる。
- ⑤上達が早く、短期間で多くの病症に対応できるようになり自信が持てる。

諸々の陰陽の考え方で、あらゆる事が解決できる。この応用が**陰陽太極鍼**である。様々な症状、原因不明の難しい病気、弁証しにくい病症でも、脈が分からない場合でも、子午治療が出来ない時でも、効果的な治療が出来るので、是非追試していただきたい。

### 「参考文献」

- 東方鍼灸院ホームページに掲載している「陰陽太極鍼の実際」などの発表論文
- 「鍼灸 OSAKA」 “腹診を考える-募穴の反応の変化を確認する” 2011 年秋季号, 森ノ宮医療学園出版部
- 「鍼灸 OSAKA」 “日本鍼灸と中医学の相輔相成より生まれた”陰陽太極鍼”” 2012 年秋 107 号, 森ノ宮医療学園出版部
- 「鍼灸 OSAKA」 “脾経腰痛を陰陽のバランスで治療する” 2014 年春 113 号, 森ノ宮医療学園出版部
- 「鍼灸 OSAKA」 “陰陽太極鍼と刺絡治療” 2015 年春 117 号, 森ノ宮医療学園出版部
- 「鍼灸 OSAKA」 “手指で診る 手指で治療する陰陽太極鍼～開穴が教えてくれたこと” 2016 年春 121 号, 森ノ宮医療学園出版部
- 「傷寒論鍼灸配穴選注」 単 玉堂(著),人民衛生出版社,1984, 新版 人民衛生出版社,2012,
- 「東洋医学の原典 黄帝内経素問訳注」 全三巻,家本誠一(著), 医道の日本社,2009
- 「東洋医学の原典 黄帝内経靈枢訳注」 全三巻,家本誠一(著), 医道の日本社,2008
- 「黄帝内経素問新義解」(巻 1～巻 12),柴崎保三(著),東京鍼灸柔整専門学校研究部, 1973～1976
- 「針灸学」完全復刻版,土屋書店,2007
- 「皮膚は考える」 傳田光洋(著),岩波書店,2005
- 「驚きの皮膚」 傳田光洋(著),講談社,2015
- DVD 「陰陽太極鍼～陰陽論で考える鍼灸取穴法の実際～ 基礎編・臨床篇」 ヒューマンワールド,2011,

※王不留行については当院にお問い合わせ下さい。

東方鍼灸院  
〒080-0010  
北海道帯広市大通南 21 丁目 14 番地 2  
TEL.0155-24-8111/ FAX.0155-24-7281  
e-mail [toho1189@toho-shinkyu.com](mailto:toho1189@toho-shinkyu.com)  
<http://toho-shinkyu.com/>